

やり直しのできる社会を！

新宿連絡会NEWS

2014.6.30
VOL. 64

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議
〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10
関ビル106号 NPO新宿気付
TEL.03-6826-7802 FAX.03-5273-6895
<http://www.tokyohomeless.com>

歩 きながら考える

笠井和明

いつもはただだと年2回しか発行しない当ニュースですが、4月からの活動再編などもあり、そのことをしっかりと説明せよとの声に、たまには真剣に伝えようと今回発行に至った次第であります。

周知の通りと云うか、告知の通りと云うか、連絡会は今までの炊き出しなどイベント的な活動を中心にしてきましたが、そこをガラリと変える再編を4月から行い、この転換は無事になんとか終了しました。その影響等の具体的な事例は本号の「パトロール班報告」に書かれていますので、あわせてお読み下さい。

まあ、何も無いところから物事を作り出し、その渦中に長年居ると、その意義や限界も含め、運動と云うか、事態と云うか、その「流れ」と云うことを意識せざるを得ないものです。

東京におけるホームレス問題の焦点でもあった公園一つとってみても、私たちの脳裏にはテント生活者が居なかった（もしくは少なかった）頃の20年

前の中央公園や戸山公園の姿がすぐに浮かびます。

そして、新宿で言えば98年の西口火災事故以降、地下街から居場所を失った路上の仲間が、これらの公園に流入し、景気も最悪な事態の中、テント生活者が一人増え、二人増え、そして、あれよあれよと「村」になるまでの過程をつぶさに見て来ました。良い面も、悪い面も、すべてを。

更にこの「村」がその後、対策の渦に巻き込まれ、一人、二人と消えていく過程も、仲間の視点で、また対策の視点でもつぶさに見て来ました。

そのような立場からすると、そこには「永遠」はないと云うことが身に染み付いてしまうのです。

人の人生において路上生活は一時の迷いと云うか、一時の不幸と云うか、そんなものだと思うのです。そうすると、その一時にどれだけ寄り添えるかが、私たちの仕事だと考えるようになるのですが、最近、路上生活者の問題に興味を持ってしまったボランティアさんなどは、その過程を残念ながら知りません。そこに行きさえすれば、路上生活者に会えます。会えさえすれば話が聞けます。人との関係なので馬が合えば長話も出来ます。ちょっとした親切もできます。親切をすることで色々なことを学べます。そして、立場を超えた関係になってしまうと、その関係を「永遠」だと勘違いをします。

先日、とある場所で、考え方が非常に尖った、活動家と称する若者と一言二言会話をする機会がありました。彼は言います「小屋掛けの自由を求めているのだ」と。私は言いました「自由と云っても、ここは所詮不法占拠なのだから、自分で土地を買って、そこに小屋掛けしてみたら？」と。まあ、そう云う皮肉はこの若者には通じなかったでしょう。もちろん、彼は悪い若者ではないと思います。彼なりにテ





ント生活者や路上生活者を心配し、現場に赴き、親交を深めて来たのでしょう。東京都が実施している巡回相談と比較すれば、その熱意は雲泥の差です。でも彼は「小屋掛け」は「永遠」なものであるべきであり、それを闘争で守らねばならぬと思っています。彼が当事者ならば、それはそれで説得力はあるのですが、そうでもないようです。そこに高齢化した社会からちょっとはみ出してしまった普通の人が住み、必死に努力しつつも儚ならぬものが、若さ故でしょうか、あまり理解できないのでしょうか。そして、自分達が作り出した「関係性」は「永遠」なものと思いたがっているのでしょうか。

私たちがかつて陥った過ちは、こうやって繰り返されています。炊き出しも「場」が重要だと云う人々もいます。しかし、その「場」はどこへ向かっていくのかを真剣に考えた人は、私たちが知っている限り、とても少数です。意図して作り出した「場」や、崇高な理念も、放置しただら続けるだけでは、そこからは何も生み出されません。その関係を「永遠」だと勘違いしている人々の癒しや、自己確認の「場」にしか、残念ながらならないものです。まあ、それが情緒的なものであればある程、本質の議論から離れ、あらぬ方向に向いてしまうなんてことがあるのでしょうか。

もう16年前になるのでしょうか、新宿の西口にとんでもないおっちゃんが居ました。酒飲みで、色々な迷惑を各方面にかけ、施設に入れても出てきてしまい、酒飲みグループをあちこちで作りと云う、変わり種のおっちゃんです。その記憶だけは鮮明なおっちゃんに、先日、新しいおにぎりパトロール時に偶然出会ってしまいました。場所は新宿の中心分ではなく、誰も知らないようなはずれの場所でした。10年ぶりくらいなので、双方遠目では最初は気付きませんでした。ベンチに座って話してみると、「おお！」。彼は何に困っている訳ではなく、「病院

が」「福祉が」とか、とりとめのない話をして別れましたが、次の週に同じ場所に行くと「笠井！おにぎりの礼だ。一杯飲んでけ！」とビールを差し出し、仲間と車座。まるで彼と会わなかった10数年を忘れるぐらい、いつもの酒飲みの姿でした。どこであろうとも、人と出会える「場」はあります。何年経っても知り合い続ける関係性も、この世界にはあります。「人」と「人」の関係であればある程。

このように路上の地縁から開放され、無縁化したとしても、個人としての自由はこの国ではまだまだあります。住む場所などは、その日暮らし。寅さんにつながる「自由」は、テントが張れなくなったとしても、それはそれで闘争などしなくても、自然に続いてしまうものです。

昨今のホームレスの現状は、東京においては、公園、道路、河川敷など、かつて集中的に対策化したものの、そこから漏れてしまっている「目に見えるホームレス」と、ターミナル駅からターミナル駅へと小荷物だけで移動し、仕事を求めたり、生活の糧を求めたりしている「目に見えにくいホームレス」に二分化し、「目に見えるホームレス」の方は相対的に昔からその生活を続けざるを得ない人々が多く、長期化、高齢化が、その傾向として言われています。対策上で云うならば、自立支援センターなどは、「目に見えにくいホームレス」の牙城であり、路上歴の浅さ、年齢の若さなどがデータとして特徴化されています。自分の生きる「場」を公園などとせず、対策の上に求めるなんていう傾向もあります。これはこれで、対策が効果的でないと、そこへの依存性などが指摘もされており、主要には役所の中であれこれ悩まされ続けています。ある意味、数の比率からすればこちらの方が本流とも言えそうです。他方で「目に見えるホームレス」の人々はどうなっているかと言えば、年々疲弊しているのが現実です。先の「自由」の裏返して、「彼等は好きでそんな生活をしているようだ」と次第に目され、都立公園などを対象にした「地域生活移行支援事業」が終了しても、「新規流入防止策」だけが管理者の要請により続けられると云う不自然さの中で、あまり大きな問題として語られることは少なくなりました。結果、救急対応や死亡事案などが無い限り、そのまま。もちろん役所的な巡回相談などはやられているのですが、それも反応なしで、そのまま。大げさな言葉で言えば、東京都的には放置され、諦められ、自然減を期待され続けて来たと言えるでしょう。

そうではいけないと言う実践が、一昨年戸山公

園、昨年の中央公園の残存テントの人々への新宿区の独自のアプローチであったと思います。それには私たちも同調し、深くかかわることが出来ました。その時の実践感覚でも、テントに残った人々の心象風景は、見棄てられて来た人々のままであり、私たちは、現状を面としてしか見ておらず、また、制度にばかり意識が向きすぎ、支援団体と云いながら個々の闇とまともにつきあって来なかったのであるなど云う反省でありました。それは長時間話せば分かる云うレベルではなく、一人ひとりの言葉の裏を読み取らなければならない壮絶な格闘でもありました。

今までは、制度さえ整えられていけば、自ずとそこへ人々は行くであろうと考えていました。事実、多くの人々はそう思って、よければと思う制度を要望したり、実践したりしています。そこにある種の奢りがあることも気付かずに。まあ、気が付かないと云うのはある意味幸せなことで、そのことを批判もしたくはありませんが、気がつくことによって変わると云うことも多々あります。現場を見続けすぎて来た私たちは、常に現状にあわせて活動も変えて来たこと、それには「永遠」などありえないこと、も再確認しなければ、それは惰性にしかつながりません。ある意味、私たちが避難所として指定し、ある時はテントを貼ることを薦め、それを維持することに躍起になり、その結果、大変な事態に陥ってしまった両公園は、私たちが「村」を目指して悲劇的な自壊をもたらした「ダンボール村」末期と同じように思えてなりません。あの時、私たちは無方針に陥り、何も作れず、混乱しか与えられず、無惨な敗北を喫していきました。そして、支援団体としても実に若すぎたのです。しかし、そうさせない時間だけは、今、私たちは幾多の経験の末、持ち合わせています。また、ここまで大きくしてしまったこの問題に対する支援団体としての社会的責任と云うものにも直面しています。

私たちから袂を分かった人々が、私たちの苦難を簡単に否定したが、結果、同じ轍を踏むのとは違い、私たちは連絡会をどこへ持って行くのかに責任を持ち、そして、変わるべき時は流れに従い、変わっていきます。

そうこう書いていると、若い方が事務所に見えました。36歳、地方都市で仕事が切られ、東京に流れてきました。たまたまウチのシェルターが一杯だったので、色々なアドバイスをしても、頭には入っていきません。どうしたら良いのか分からない状態では、残念ながら何を言っても伝わらないのです。

聞いてみれば、この1週間、食事もまともに採っておらず、睡眠も同様だそうです。食べなければ、思考も回らないし、寝なければ悪いことしか追いつめられたときは思いつきません。そこで、おにパト（おにぎりパトロール）時に余って冷凍しておいたおにぎりを電子レンジでチンをして渡しました。寄付でもらった栄養ドリンクも渡しました。そこでちょっとした安心感が生まれます。私たちが出来るのは、そんなちょっとしたことです。施設など寝る場所の資源は増えたとは云え、それはまだまだ限界はあり、自分たちが出来る範囲でしかありません。無理に囲い込まないこと、無理に信頼を押し付けないこと、支援のモルモットにしないこと、当人に自発性が起こるような環境を作ること、ここら辺は支援の前提となるべきでしょう。彼らは自分達の「場」は、自分達で作ります。そんなにムキになって私たちが作り出すこともないのです。

ボランティアさん達や若い活動家さんもまた同様です。路上の人々を放っておけないとする「優しさ」は、「場」があることで、下手すれば「共犯関係」をも作り出します。「場」を流れとして見るのではなく、その「場」を固定したものとして見がちだからです。「変わらない夢」を人は見たがるものなのでしょう。

そう云う人が集まって社会が構成されているのですが、年を取れば人間が「成長」するかと云えば、それはどうも正しくはなく、その人の人生が重ければ思いほど、「思い込み」や「頑固」の力が強くなり、柔軟には決してならないのも面白いものです。まあ、そうでなければ生きていけない切なさや云うか、涙なしにはこう云うことはなかなか語れません。年を取って、なおかつ路上生活を続けている人々はそれぞれ色々な人生を重ねています。色々な課題があったとしても、本人、それを課題と思っていないこともあります。かと言って後ろ向きな人かと云え



ば、決してそうではなく、自らの器の中で、それを自然なものと受け止めながら、懸命に生きています。課題が明確になるときは、病気になった時とか、病気が重くなった時とか、工事だ何だと、環境が変わった時とかになります。その時にどうするのかと云うのは、非常に難しい課題となります。しかし、長い目で見ると、その時、多くの人々が、その人にとって良い方向の決断をして来たと思います。路上が良いとか悪いとかの社会的価値観ではなく、その人にとって良いか悪いか、何の確信もないが、その人の「思い込み」や「頑固」の判断として。

「目にみえにくいホームレス」を私たちは躍起になって探そうとは思いません。そう云う人々が、先の彼よう「目にみえた」時、そして、そう云う人々が課題を見つけた時、相談に乗れば良いだけの話です。ここら辺は、その時々々の景気の動向や、都市と地方の関係などに左右されるので、増えたり、減ったりする存在です。

他方「目に見えるホームレス」は年を重ね、その「場」での生活を重ね、そうでありながらも気まぐれな対策からは遠ざかる一方で、地域などの善意の関係性の中で、辛うじて存在が認められています。安定が良いとは思いませんが、それにしても不安定な状況に置かれ、まるで綱渡りのように思えるのです。「目にみえる」のだから気付こうと思えばそれは良く見えます。そして時間帯さえ会えば、話も出来ます。どうも「このままで良い」とする国が実施した全国ホームレスアンケートの数字が一人歩きしてしまい、今残った人々は自立の意思のない者か、精神疾患者にされそうな時流ですが、「目に見える」のだから、色々話をしてみれば良いと思います。さすれば、その印象はかなり変わっていきます。しかも、長期に生活を維持してしまっている人々はたいがい何らかの「仕事」をしています。田舎に行って80歳近いじいちゃん、ばあちゃんが畑仕事を黙々としているのに都会の人は驚きますが、「死ぬまで仕事」と信念を持ち、身体を動かしている人々は、その「仕事」に誇りを持っています。その誇りを踏みにじるような自立支援や福祉では、それらの人々の夢すら奪いかねません。平たく言うならば、人の生き方を「尊重」しなければなりません。それを前提に、対策と云うものは成り立つ筈で、勝手に、自立の意思なしとか、精神疾患だとか言いふらすものではないと思います。

もちろん、当事者の声が「このままで良い」としても、それを額面通りに受け取って、現状を無理に固定するような発想は如何なものかと思えます。そ

こには「議論」が必要とされます。当事者がこう言っているのだから、そうすべきとする論法は、まるで腫れ物に触るような、差別的な言い回しに聞こえてしまいます。ここにも「議論」がありません。今まで、私たちは、(ある意味作られた)「大きな声」を拾ってきました。それはそれで必要なことなのかも知れません。他方で「小さな声」はことごとく抹殺して来たのも事実です。今は、「このままで良い」と仲間が言え、何で? どうして? と問い返すことが出来ます。そして、その言葉の裏の意味も理解することも出来ます。まあ、ケースワーカー化したと言えば、そうなのかも知れませんが、そうやって多くの人々と出会い、話し、議論をし、支援活動と云うものは深まるものなのでしょう。

今度は電話が来ました。「私の彼がホームレスになっちゃたんですけど、どうやって探したら良いですか?」と地方都市に在住している若い声。普通の人なら笑って済ましてしまうのですが、そうもいきません。探し方のコツなどを伝達。「諦めずにがんばって下さい」。

まあ、開かれた東京(または大都市)と云うのはそう云う場所です。目に見えたり、見えなかったり、数日野宿をしたり、長期に亘り野宿生活もしてみたり、と。常に流動し、オリンピックがあるからと工事が盛んになれば、きっと、その後は不況になれば、また新たな問題が発生したりと、まあ、ホームレスも永遠ではないのです。語弊があるかも知れませんが、だからこそ都市下層の問題は面白いのであります。

「生活困窮者自立支援法」なるものが制定され、その枠内にホームレス対策が吸収されようともしています。地方ならいざ知らず、都市ではそれは必ずしもうまくいかないでしょう。そして、「目に見えるホームレス」はその中でも取り残されてしまうでしょう。社会問題には流行があるようで、そう云う意味では旬は過ぎています。しかし、ホームレス対策は大都市において残すべきだと私たちは考えています。そして、だからこそ、へそ曲がりな私たちは今躍起に、「目に見えるホームレス」と可能な限り接し、語り、次の生き方を共に見いだそうとしています。

こう云う転換が良かったのか悪かったのかは分かりません。しかし、自らの判断を抱えながら生きて行かねばならぬのが、私たちの流儀でもあります。迷いながら、そして、歩きながら、ひたすら考えることとしましょう。

<了>

炊

き出しからおにぎりへ—変わったもの・変わらないこと—

新宿連絡会パトロール班報告

1

2014年4月から、活動の形が変わった。中央公園で行っていた炊き出しがなくなり、おにぎりを渡す式になった。それに伴い、パトロールの仕方に異同があった。

3月までは日曜日ごと、18:00~19:00にまず配食する。片づけを終え、19:30~21:30に中央公園と新宿駅周辺を回る。途上、野宿の仲間に週刊紙を届け、求めに応じ市販薬を調える。必要なら、あれこれ相談に乗る。休憩後、22:30~に再び駅西口の地下を見、23:30ごろ解散。

4月から、特に前半部が改まった。パトロールが食事の提供を兼ね、日曜日の16:30~19:00おにぎりを携えて歩く。範囲は元の区域に、さらに近隣が加わった。二度目の巡回は従来通り。時間帯が早まり、4~9月は陽光が射している。夜の暗さは外で寝ることと、室内への帰着を分ける。明るいなかではその差が縮まり、割と打ち解けた雰囲気になれる。

まだ起きている人が多く、言葉を交わす機会が増えた。表情やしぐさ、顔色、皮膚の具合がつかみやすい。炊き出しにあわせた医療相談会が更新され、月に一度、医療者に同行を請う。日の残りは、こちらにとっても益するだろう。

危急に際し、じっくり対処できるのがあるがたい。すでに救急搬送に同乗する例があった。検査、診断、入院に立ち会い、なお当日中に収まる。以前だと深夜をすぎ、最終電車を気づかうのがもっぱらだった。反面、役所の窓口が開くのに、長くかかるのは注意を要する。路上で待ってもらうか、別の選択肢を探すか、判断に迷うかもしれない。

心がける基本は、これまでと共通する。即興的

に、すばやく考える。安易に他人任せにしない。完璧な解決にこだわらず、仲介を試みる。与えられた条件で最善をつくす。

何かをするのが、正しいばかりと限らない。救急車を呼ぶのすら、時に状況をこじらせる。区内に受け入れ先がなく、遠くへ運ばれる。軽い処置で病院を出されると、弱った相手と不慣れな土地を行く羽目になる。翌朝、福祉事務所を経たほうが、確かさが増す。

現状維持、なさざるの善が少なからず想定できる。慎重さのあまり、犠牲を強いては元も子もない。見極めが大切で、やはり一貫する。

2

野宿の状態で、食事が不安定なのは避けがたい。方法のひとつは、体を空腹に慣らすことだという。当人による代表的な証言から。「ホームレスになったら、三度三度食べたら駄目って言われてさあ。胃を小さくしておかなきゃ路上じゃ生きていけないと教えられてさあ」(宮下忠子『赤いコートの女 東京女性ホームレス物語』)。

飢えをしのぐのに、炊き出しが有効なのは明らかだろう。冬の汁物は心身を温め、本当に助かるという声を聞く。一方、ためらいをもらす向きがあり、こんな発言が引かれている。「…炊き出しとかそんなのだけ食ってたら、それこそ、働かないで生きていけるだろうけど、生きてるだけになっちゃうよ。…人にもらってばかり食って生活してたって、しょうがないじゃん」(青木秀男編『場所をあける！ 寄せ場/ホームレスの社会学』)。

実際は、彼らはもらうだけでなく、しばしば与える側に立つ。ある著者は、そのあたりの経験をこう語る。「何度、私はこうやって、野宿の人たちから食べ物をわけてもらってきただろう。釜ヶ崎でも、神戸でも、いつもいちばん『もたざる人』たちから、いちばんあたたかい食事をもらった」(北村年子『「ホームレス」襲撃事件と子どもたち』)。

路上を巡っていると、確かに何かしらもらう。食料、衣類、日用品、果ては駄賃といって小銭をくれたり。こちらから、それなりにお礼を用意する。物の交換は、時間や場所に縛られる。食べ物は傷む前、服は運べる量でないと意味がない。蓄えがきかず、差を生みにくい。



大がかりな炊き出しは、こうした関係を見えづらくする。配給や分配に似て、ややもすると優劣に結びつく。小ぶりにおにぎりに、そこまでの力はない。いわば気の置けない贈り物で、代わりにお返しをいただく。

返礼は間接的で構わない。野宿の世界から、学ぶところは大きい。衛生や消費、所有に関する観念が問い直される。他人と接し、支援者の〈自分が変わる〉。これだって立派な贈り物に違いない。

同じことが相手についていえる。野宿者もまた、常に別様である可能性を含む。お互いに変わりうる存在、ここに相互性の土台が認められる。今回の転換は、炊き出しを手放すことでその原点、本来あったはずの相互性へ立ち戻ろうとするのかもしれない。

3

炊き出し停止の波及を調べるため、新宿で4～5月に聞き取りをした。約80名の野宿者に尋ね、「影響あり」「なし」の比率がほぼ半々だった。

「あり」のほうは、答えが多様さに富む。食事の量、質について「一食分欠け、困っている」「おにぎりより丼飯がいい」「炊き出しは献立が楽しみだった」。こちらの体制や作業に触れ「隔週で続けられなかったか」「おにぎりをたくさん作れ」「もっと遅く配りに来てほしい」。入手方法にちなみ「どこでおにぎりがもらえるかわからない」「回る時間、地点がはっきりしない」「他の炊き出しの場所を知らない」。

炊き出しの場は、衣類の提供を兼ねていた。それを失い、戸惑う声が寄せられた。「食事より服に困っている」「冬服から春物へ着替えが進まない」「自分に合った寸法の服が得にくい」。

「なし」の理由は、おおむね二つにしばられる。元から炊き出しと疎遠だった層「やめて構わない、あまり行っていなかったから」「食料は自前でまかっていた」「お金がある時は、世話にならないようにしていた」。もう一群、別の地域で補う人たち「他の場所へ行き始めた」「渋谷の炊き出しへ通う」「代々木の炊き出しを用いる」。

両者の違いはある程度、一般化してとらえられる。野宿の状態は変化に対し、総じて代替策に乏しい。影響が多岐に表れるのに比べ、やり繰りはわずかな手段に頼るしかない。

いくつかの点で、意見が割れたのが興味深い。例えば「おにぎりでは足りない」と「十分満足」。「別の炊き出しへ行くのが大変」と「よそで間に合う」。炊き出しを使う側の実感として、次のような

対立があった。「列に並ぶのは大勢に紛れ、気が楽だった」「並んで待つのが苦痛だった」。

発言には、なるべく応じるよう努めた。おにぎりの入手は、回る道順と大まかな時間を伝えた。着替えは、区内にある無料シャワーの利用がてら可と。至らなかった面も多い。炊き出しの情報は複雑で、当人らで共有してもらおうほかない。

この種の聞き取りは、危うさがつきまとう。支援者の弁解、口実になりかねない。それでもいざという時、本人たちに問う習慣を忘れずいたい。対話や応答のすべこそ、パトロールの柱であり続ける。

4

当地に限らず、炊き出しの改変はまま起きる。人によっては、そのつど影響を被る。原因の一端が、こんなふう 요약される。「おじさんたちは独自の一週間のカレンダーを頭のなかに持っている。それはいくつかのホームレス支援団体が行っている『炊き出し』カレンダーである。…そのタイムスケジュールに沿って計画を立てて、日々移動するのだという」(山本雅基『山谷でホスピス始めました。『きぼうのいえ』の無謀な試み』)。

今回は、この日程表がながしき書き換えられた。聞き取りによると10名前後が渋谷、代々木の炊き出しへ移動を告げた。生活圏そのものを移すかはともかくとして。

日曜日の二回のパトロールで会う延べ数を、同範囲で比較すると3月が平均して250名ほど、6月が220名と減少する。これは主に時間帯の繰り上げによるだろう。新宿には二つの集会地、中央公園と駅西口地下がある。前者の20:00、後者の23:00の人数は3月が約90名と80名、6月が横ばいか微増する。これらから、大幅な転地に至っていないと思える。

今度の変更は、こちらがおにぎりを持って訪れ、先方の動く労を省いたともいえる。聞き取りから推し、2～3割の炊き出し未利用者と新たな接点が出てきた。目的はおにぎりに終わらない。各所で相手と面し、相談を受ける活動を引き継ぐ。

対応するのに、凝った助言は必要ないだろう。耳の聴こえに難がなければ、小さな声でゆっくり話す。相づちや沈黙が間をつなぐ。立ち入った事情を他言せず、にわかにならぬのみもしない。真偽を不問に付す。野宿の状態はむき出しの姿と裏腹に、意外と自らを装う。なまじ知ると先入観を招く。

相談の内容は枝葉を除き、三つに大別される。住居、健康、仕事。どれも正式な手続きには、役所の窓口を通さなくてはならない。事実確認は、そちらにゆだねる。

予断を控えるせいで、初歩的な誤りを犯すことがある。年金がかなりあったり、他区で生活保護にかかっていたり。結果、無駄足を踏ませてしまう。

上首尾に映っても懸念が残る。こちらがかかわるのは入り口のごく一部、あとは本人と関係各位の尽力に託すのみ。そこで繰り返し、次の戒めを肝に銘ずる。支援(者)とは正邪、巧拙、功罪のあわいにまたがり、両義性を帯びている。

5

路上には、自費で食事をまかなう人たちがいる。先の聞き取りでも、「お金があれば行かない」の答えが見られた。炊き出しを使い、現金を残すほうが得なのに、なぜかそうしない。いわゆる都市雑業が、元手の場合があるだろう。雑誌を集めるのに、新号の発売日は大事な稼ぎ時になる。

仕事と炊き出しをはかりにかけ、優先順位が入れ替わるのかもしれない。当人による次の言葉は、そのあたりを微妙に突いている。「炊き出しに頼ると、自分で努力しようという気持ちがなくなってしまう。そこが落とし穴なんだ。自分で何とかしようと思ったほうがしっかり稼げるし、おいしい飯にありつけるんだよ。不思議なものだけだね」(坂口恭平『ゼロから始める都市型狩猟採集生活』)。

支援の重要な担い手として、教会が挙げられる。新宿周辺で、いくつか熱心な取り組みを耳にする。

米国ではさらに本格的で、日に二度、配食するところがあるという。食事の提供は命の綱で、それ自体は非難にあたらない。同時に、良くも悪くも生活の糧を握り、凶らずして〈パンのみに生きる〉を演出する。

ニューヨークの野宿者の、もどかしい気持ちを紹介されている。「一日二回食事を出してくれるから、そういう場所を二つ見つければ一日四回、腹だけは満たされるわけさ。でも食べるために四回も長い列に加わり順番待ちしていたら、他のことは何も出来ない」(松島トモ子『ホームレスさん こんにちは』)。

炊き出しを開くと人が集まる。地域住民と摩擦が生じ、縮小や移転を迫られる。是非を巡り、こうした外からの圧力がある。当人たちの発言にはそれと別に、自発的な問いかけがあるように思う。

今後の展開が、解答に値するかわからない。ひとつはつきりしているのは、列に〈並べる / 並ばされる〉〈待たせる / 待たされる〉という関係が消えたこと。少なくともその点では、より等しい立場になった。

とはいえ、合格を楽観できない。聞き取りにあった通り、野宿者も決して一枚岩ではない。まして支援者の大半は、ふだん寝食を共にしない。路上の様々な悩みに、すべて共感するのは至難の業。隔たりは容易に埋まらないだろう。

差異のなかで対等を生きる。活動の形がどうあれ、この姿勢は変わらず追い求めたい。たとえ負け惜しみにもすぎなくても。

2014年4~6月パトロール記

月	次数	時間	コース					延べ計
			2都庁	公園南	公園北	駅東	駅西	
4月	1次	16:30~	65	21	33	16	16	151
	2次	22:30~						75
5月	1次	16:30~		22	36	29	21	108
	2次	22:30~						78
6月	1次	16:30~	100	19	27	27	24	197
	2次	22:30~						74
平均	1次	16:30~	(55)	21	32	24	21	153
	2次	22:30~						76

・パトロールの実施は4~5月が各4回、6月は5回。表中の数字は各回に会った野宿者を時間、コースごとに足し、月の(雨天はその)回数で割った平均、単位は人。

・コースの詳細は次の通り。2都庁=第2都庁舎下(雨天時のみ)、公園南=中央公園南側(都庁下~ジャブジャブ池)、公園北=同北側(水の広場~ポケットパーク)、駅東=新宿駅東側(甲州街道~西武新宿)、駅西=同西側(4号街路~小田急)、西地下=同西口地下(4号街路~地下広場)。

・雨天は4月が一度、6月が二度。屋根つきの第2都庁舎下が解放され人が寄る。延べ計が晴天だけの月に比べ、2~3割増しになる。3月比はその分を差し引いて試算、平均のカッコ内は参考値で加算。

・おにぎりは1人2個ずつ、130人分ぐらいを1次パトロールに携行。過不足が生じたら、1人当たりの個数や時間をずらして回り直すことで調節する。

新宿連絡会 会計報告

2013年度決算、2014年度4-5月期

今期も多くのご支援を頂き、ありがとうございます。

頂いたお金は連絡会の運営費や仲間のために全て使い切っております。現在累積赤字中となっておりますが、必要性のある活動が続きますので、今後ともご支援宜しくお願い致します。

2013年度 新宿連絡会会計収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		衛生管理費	23,054
1 寄付金収入	4,450,180	支払手数料	14,038
		車両費	7,260
計上収入合計		雑費	1,192
II 計上支出の部		計上支出合計	4,908,299
1 事業費		計上収支差額	△458,119
炊き出し事業	2,208,075	前期収支差額	△169,800
越年越冬事業	1,193,865	次期繰越金	△627,919
夏まつり事業	772,269		
池袋支援事業	60,000		
その他活動事業	459,546		
2 管理費			
通信費	116,476		
消耗品費	40,644		
事務用品費	11,880		

2014年度 4-5月新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		消耗品費	10,592
1 寄付金収入	117,450	事務用品費	776
		衛生管理費	5,143
計上収入合計		支払手数料	1,104
		車両費	600
II 計上支出の部		計上支出合計	339,228
1 事業費		計上収支差額	△221,778
弁当/おにぎり事業	268,770	前期収支差額	△627,919
その他活動事業	13,473	次期繰越金	△849,697
2 管理費			
旅費交通費	19,410		
通信費	19,360		

<4月からの連絡会活動>

①毎週日曜炊き出しとパトロールを統合し、炊き出しに出来ない仲間を含め、新宿区全域と周辺の路上の仲間に食事と情報を提供しています。

また、路上生活者のシェルターの食事提供を週に一回、ボランティアで手伝っています。

- ②火曜、木曜のシャワーサービスを実施すると共に、着替え用として衣類を提供をしています。
- ③医療相談会は毎月1回従来通り実施しますが、鍼灸相談会は事務所で、医療相談会は巡回型の相談を実施しています。
- ④その他日常的な相談を事務所にて実施しています。

●活動カンパ 振込は、郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、<http://www.giveone.net/>「Give One (ギブワン)」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけて下さい。)からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします●

★郵便物は

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛てでお願いします。